

「西郷売り出す」のきっかけになった、
斉彬との出会いの頃の彼の境遇心境について
繰り返したい。
西郷は二十八歳の時に斉彬に出会っている。
自分は、彼の出自生育環境と共にこの年齢にもこだわる。

それ以前の西郷は、
既にかいたように徴貢の現場で下積みの
役人生活を十年近くも続け、
農民達の窮状をつぶさに見てきていた。

その上で、政治はこうあらねばならない、
上にたつものはこうでなくてはならない、
と絶えず思っている。

橋本の言ではないが“非憤慷慨”していたのである。
通常は、藩の下役人がいくら考え、
いくら机上で組み立て思いめぐらしたところで、
限界があると考えるところだが、西郷は違った。

彼は、岩をも貫く心意気で考え抜き、
思い抜き、そして実践した。
繰り返しなされた農政にかかる建白書の草起提出がそれであった。
意欲が充満し、横溢しきっているところで斉彬に見出されている。

唐突だが、「恋」の話をひとつ。

司馬氏が、小説「最後の将軍」の中で
一橋慶喜のことを次のように書いた一節がある。

「…しかしなにぶんにも唐橋は美貌でありすぎた。
上背がありすぎるのが難であったが、
手がほそく、指が箸ほどに細い。
あれほどの指の細さでいきいきと働いている唐橋の体はどうなのか、
どのようになっているのであろうと思い、
唐橋をみるたびに想像し、

好奇心をおさえかねた。

恋には、似ている。

しかし慶喜の環境では恋という心情は持ちにくい。

恋の徴候がその種の好奇心であるとするれば、

慶喜の想いはつねに好奇心の段階でらくらく成就され、

恋という鬱屈にまで成長しなかった。

とにかくも慶喜の身のまわりを世話をする女中たちのほとんどが、

慶喜の好奇心の対象になった。……」

いかにも司馬氏らしい言い廻しなのだが、

人間は何でも自分の思い通りになる環境、

いわゆる銀のスプーンをくわえて生まれてくれば、

一般の人からみてどんなにうらやましく思える事象も

当たり前になってしまい「ロマン」までは行き着かない。

心ときめく、というのは……

あるものを手に入れたい、

しかし思うようにはならない、

という伏線があり、紆余曲折の末、

それに手が届きそうになった時ときめきを感じ、

実現した時充足感に満たされるのであろう。

大名クラスの身分の人の心には「恋」などという、

時間をかけながら結晶作用といわれる化学反応を持つような、

まどろっこしい情感は育たないのかもしれない。

西郷は違う。西郷の環境は恋が生育し易い。

西郷における往時の「恋の相手」は

「正しい為政に対する志」ということになるろう。